「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化

平成30年度　特別の教科道徳のまとめ

○　研究大会実践の解説

１年「きまりをまもること」（C　規則の尊重）

○　研究大会の成果・課題を踏まえた実践

１年「じぶんのよいところ」（A　個性の伸長）

実践者　　阿　保　裕　也

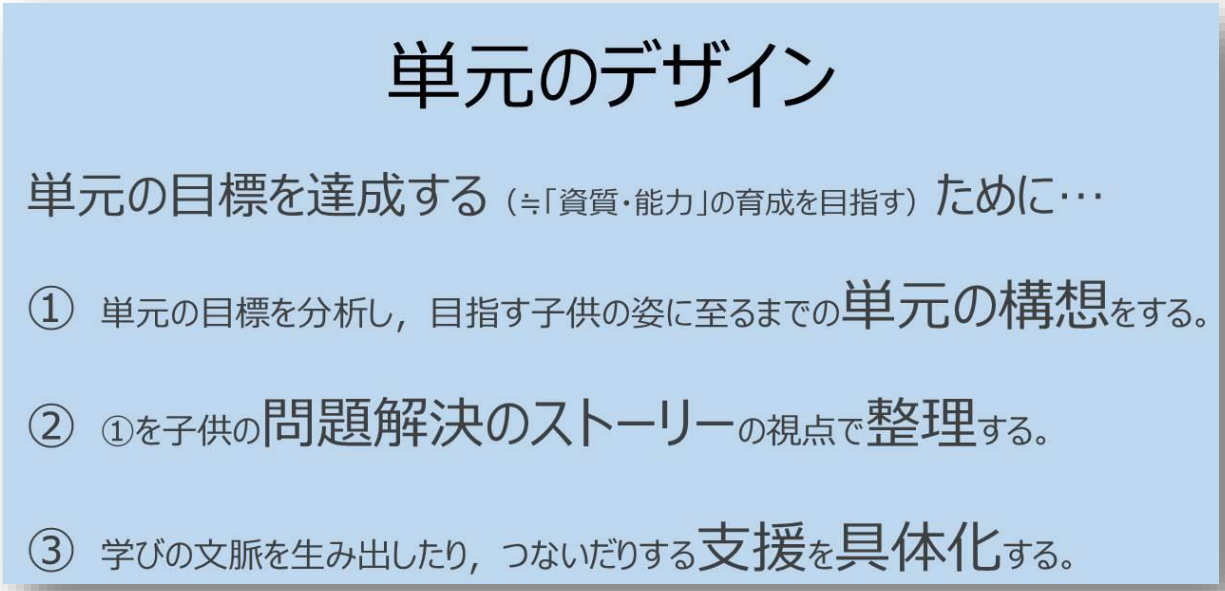
平成 30 年度 附属函館小学校研究について

平成 30 年度　北海道教育大学附属函館小学校　研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化
～「学びの文脈」に基づいた各教科等の単元のデザイン ～

* 課題設定の理由と研究の経緯　については，「研究のまとめ」を参照して下さい。

1.　「単元のデザイン」とは



まず前提として，授業づくりを行う時に重視しなくてはいけないのが，主体的・対話的で深い学びを通して，単元の目標を確実に達成することです。そのための，「単元のデザイン」は，本校では 3 つのステップにより行われています。

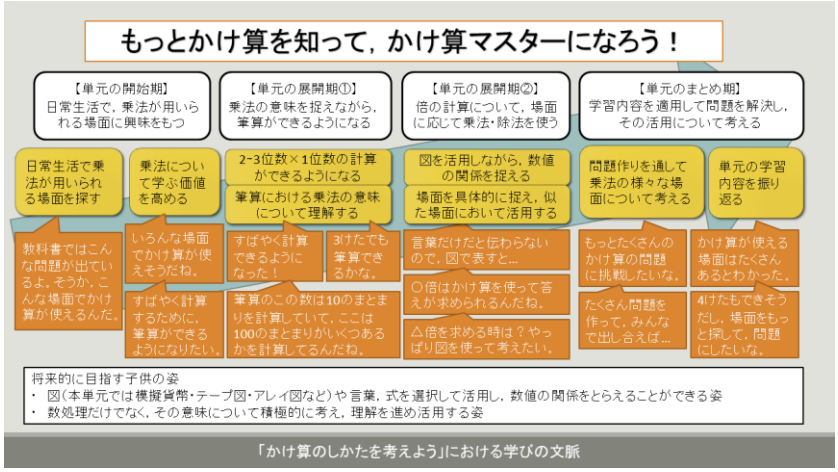
最初は，単元の目標を分析し，目指す子供の姿に至るまでの単元の構想をします。学習指導要領の内容を確認したり，各教科書会社の教科書を比較したりすることなどを通して，どのような学びを展開すれば，単元の目標が達成できるのかを考えます。その時，単元の終了時における目指す子供の姿から逆算し，どのような過程を経てその姿になるかを構想することも重要です。このようにして，単元の構想をすることが，第 1 のステップです。

次は，その学習活動の流れを，子供の問題解決のストーリーの視点で，整理します。先述の通り，主体的・対話的で深い学びを通して，資質・能力を獲得・育成していくには，子供が学びたいと思える「問題解決のストーリー」が重要になります。子供の実態を捉え，単元における問題（課題）を解決することに，必要感や必然性を感じるような単元になるよう整理することが，第 2 のステップです。

最後に，「学びの文脈」を生み出したり，つないだりするための教師の支援や手立てを具体化します。「学びの文脈」を通して，子供が主体的・対話的で深い学びをしていくには，適切な教師の関わりが重要です。それは時に直接的な関わり（対話や発問など）であったり，間接的な関わり（場の設定や環境整備など）であったりします。また，各教科等の特質や単元のもつ特性，児童の実態などにより，その手立ては多様になり得ると考えています。その手立てについて考え，単元の中で適切な支援ができるよう具体化していくことが，第 3 のステップです。

2.　単元における資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

> ①　教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる資質・能力（国語力・数学力など）
> ②　教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力（言語能力・情報活用能力など）
> ③　現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な資質・能力（安全で安心な社会づくりのために必要な力など）
>
> 中央教育審議会答申（中教審 197 号），p27



「かけ算のしかたを考えよう」における学びの文脈

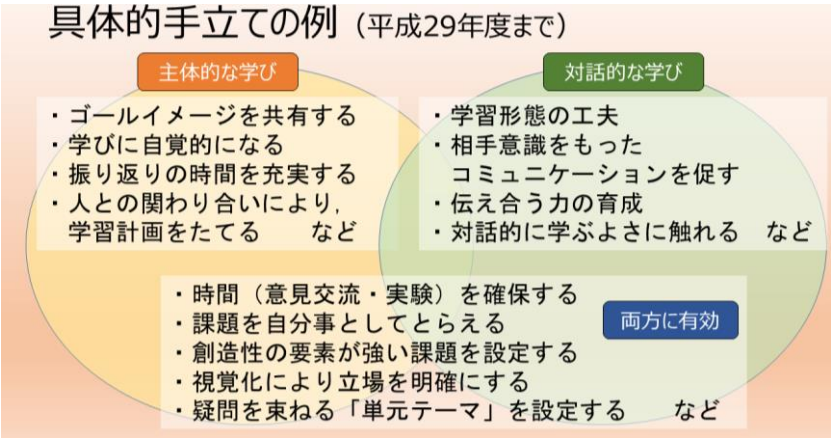
これまでの研究で，資質・能力の育成のために「学びの文脈」が重要であることはわかってきました。そして育成を目指す資質・能力については上の 3 つがあるとされています。

これまで本校では，「学びの文脈」は①の資質・能力の育成に資するものと考えてきました。

今年度は，本校において育成を目指す資質・能力の軸を①としながら，その単元で育成を目指す資質・能力が②や③の資質・能力の育成にどのようにかかわり，「学びの文脈」上でどのように表されるかを追究しています。

具体的には，単元の学習終了時や，その教科等を学び進めた時，あるいは将来的な（各教科等の目標に沿った）子供の姿として授業者がイメージし，それに向かう姿が見られようにすることに挑戦しています。そのために，指導案上で「学びの文脈」を図化することで，①の資質・能力の育成はもちろん，②や③の資質・能力とのつながりを捉えることができることを期待しています。

3.　「学びの文脈」を生み，つなげる具体的手立て



今回の研究では，これまでに行われてきた授業づくりにおける具体的な手立てを，各教科等の資質・能力の育成という視点からもう一度見直し，単元の学びをどのようにつないでいるのかを示すことに挑戦しています。これにより，授業にどんな学習活動を盛り込むことで「学びの文脈」を生み，資質・能力を育成することができるかを，より明確に見出すことができると考えました。

「学びの文脈」を”生み出す”ための手立ての多くは，単元や題材を選びません。また，教科等も限定されない（汎用性が高い）ことも多いです。例えば，「気付きを生む資料と出会う」ことや，気付きから「単元テーマ」を設定するなどの手立てです。その多くは教科横断的に活用できると言えます。

そして「学びの文脈」を”つなぐ”ための手立ては，各教科等の特質に応じて行われる（「見方・考え方」を鍛える）学びの場面で多く見られます。例えば，「教師との対話により目標に迫る」「既習との関連を明確にして統合的・発展的に学ぶ」などです。その多くは，より「深い学び」を実現する手立てとして，活用できると言えます。

特別の教科道徳　研究大会実践の解説

１年「きまりをまもること」（C-規則の尊重）

（1）本学習における，資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

特別の教科道徳における，「学びの文脈」とは，

> 目指す子供の姿を明確にし，各学校の教育活動に合わせて，道徳の授業を適切に配置すること。

であると考えます。

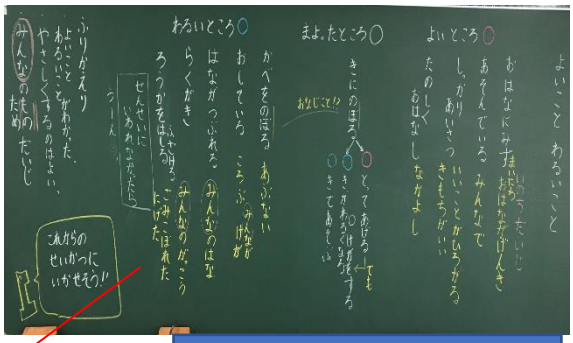
本校の道徳教育の全体計画の中の各学年（低学年）で目指す子供の姿に，

> 周りのことを考え，みんなで楽しく，安全に生活し，自分たちの生活に合ったきまりを創り出していく子供

という項目があります。本学習（Ｃ－規則の尊重）に強く関連する項目であり，様々な学習や日常生活においての具体的な子供の姿を想定し，各教科の学習や行事などのつながりを強く意識しながら教育活動を行っていきました。

体育科　たからはこびゲーム

国語科　読み聞かせ



道徳科　よいこと　わるいこと

行事等

- ［5月］交通安全教室
- ルールを守らないと事故にあってけがをすることもあるんだね。
- ［5月］スポーツ祭
- 自分一人くらいならおしゃべりしてもいいんじゃないかな。
- ［10月］ 桐の子発表会

各教科

- ルールを守らないと面白くないし，いやな気持ちになるね。
- ルールがきまってないことは自分たちで考えて決めていけばいいんだね。
- ［6月］ 体育 たからはこびゲーム
- ［7月］ 国語　読み聞かせ としょかんライオン
- みんなが納得できるルールを考えていかないとだめななんだね。
- ［9月］ 体育 まとあてゲーム

道徳科

- 小学校にもたくさんのきまりがあるんだね。
- よくないことをすると自分や周りの人が困るんだね。
- よいことをするとおたがいにいいきもちになるね。
- みんながしているから，自分も大丈夫と考えることもあるかもしれないな。
- ひとりひとりがよいのかわるいのか考えないといけないね。
- ［5月］【よいこと　わるいこと】 A「善悪の判断，自律，自由と責任」
- きまりをまもるとみんなが安全で楽しくすごせるね。
- せんせいにしかられるからきまりは守らないと。
- ［１１月］【みんながしてるから】 A「善悪の判断，自律，自由と責任」
- 自分だけなら…，ちょっとくらいなら…というきもちをなくしていきたいな。
- ［本時］【きまりをまもること】 C「規則の尊重」『どうしてかな』日本文教出版
- せんせいにしかられるからきまりは守らないと。
- きまりをまもらないと自分がこまることがあるんだね。
- ［9月］【みんなでつかうもの】 C「規則の尊重」『そろっているけど』日本文教出版
- ［11月］【すこしだからいいの？】 C「規則の尊重」『おおひとやま』日本文教出版
- ［10月］かずやくんのなみだ C「公正，公平，社会正義」
- 仲間外れにしないでだれでも入れてあげたいな。
- ［7月］もりのプレゼント C「公正，公平，社会正義」
- ひとによってちがうたいどはよくないね。

日常の生活

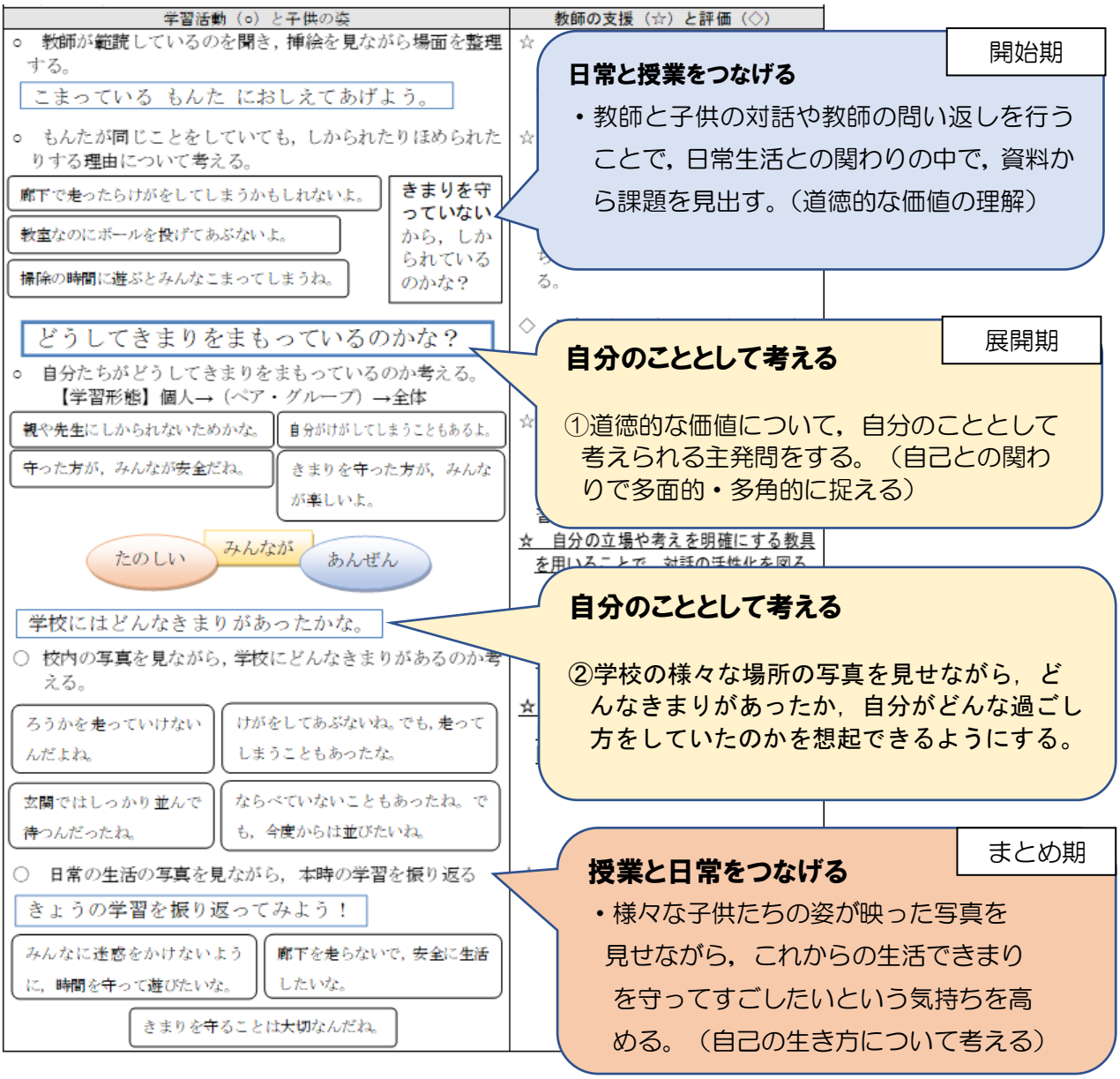
- ルールを守らないと面白くないし，いやな気持ちになるね。
- 自分だけが得するルールを作ってずるいなあ。
- 休み時間，登下校など
- 小学校にもたくさんのきまりがあるんだね。
- ルールがきまってないことは自分たちで考えて決めていけばいいんだね。
- みんなが納得できるルールを考えていかないとだめななんだね。

具体的な子供の姿を想定することによって，様々な場面において教師が行うべき支援が明確になります。子供たちは，道徳での学びを自ら様々な活動と関連させて考えたり，道徳の学習自体が「日常の学びで生きる教科」であると捉えたりするようになっていきました。

学びの文脈は，道徳の学習（単位時間）においても重要です。本学習では，

> きまりを守ることのよさやきまりの意義について考えたり，思いを交流したりする活動を通して，身近にあるきまりのよさや意義，きまりを守ることの難しさについて考え，身近なきまりを進んで守ろうとする心情を養う。

という本時のねらいに向かうことができるよう，「学びの文脈」を次の通り構想しました。



⑵「学びの文脈」を生み，つなげる具体的手立て

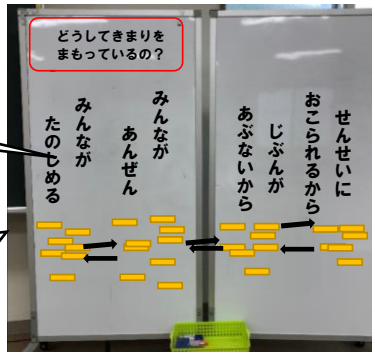
学びの文脈を生み，つなげることができるよう，下記のような３つの手立てを行いました。

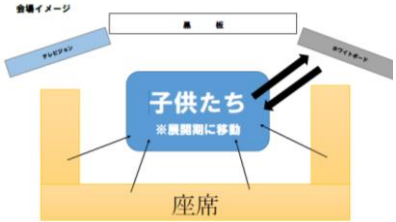
手立て①　対話の活性化を図るため，自分の立場を可視化する。

自分の考えがどの考えに位置づいているのか，黒板に出された意見の中で自分の考えに近い意見のところにネームプレートを掲示する形式をとりました。自分の立場を明確にすることで，その意見をもった根拠を考えることができたり，その根拠を基に子供たち同士での対話が生まれたりすると考えました。

ここは最初に意見として出されたものから，話し合いを経て増えていきます。

**自分の考えに近い考えの所にネームプレートを貼ります。
また，相談しながら，自分の考えを見つけて発表していきます。考えが変わったら張り替えてもよいことにしました。**





子供たちが必要に応じて話しやすくしたり，自分の考えが変わった際にネームプレートを動かしやすくしたりするために黒板の前に座って学習する場の設定を工夫しました。

手立て②　実生活と結び付けたり，理由について考えたりできるような問い返しを行う。

資料で起きているできごとはあくまでも資料内で起こっていることで，自分のこととして考えるのは難しいです。そこで，できごとを整理しながら，実生活と結びつけられるような子供たちとのやりとりを行いました。そうすることで，普段の生活とつなげて考えることができたり，きまりを守る難しさについても気づくことができたりすると考えました。

主発問「どうしてみんなはきまりを守っているのかな」という発問をした後，児童から出された意見については，子供たちの考えをゆさぶる問い返しを行っていきました。例えば，「どうしてかな」と理由を問うたり，「もし，先生にしかられなかったら守らないのかな」と仮定の話をしたりするなどして，自分が「どうしてきまりを守るのか」「もっとよい考えはないのか」などの自分がもっている考えの根拠を整理したり，よりよい意見がないのか考えたりすることができると考えました。

手立て③　学びと日常生活がつながる資料の提示を行う。

日常生活と学びの中で出た自分たちの思いや考えがつなげられるような，子供たちの日常生活の写真や校内の写真を提示しました。展開の後半で校内の写真を見ながらきまりを思い出す活動をすることで，学びを意識しながら「自分はどうだったかな」「これからは気をつけていきたいな」という思いを高められると考えました。

振り返りには，普段の子供たちの活動の様子がわかる写真を提示することで，日常の具体的な場面を意識した振り返りができると考えました。

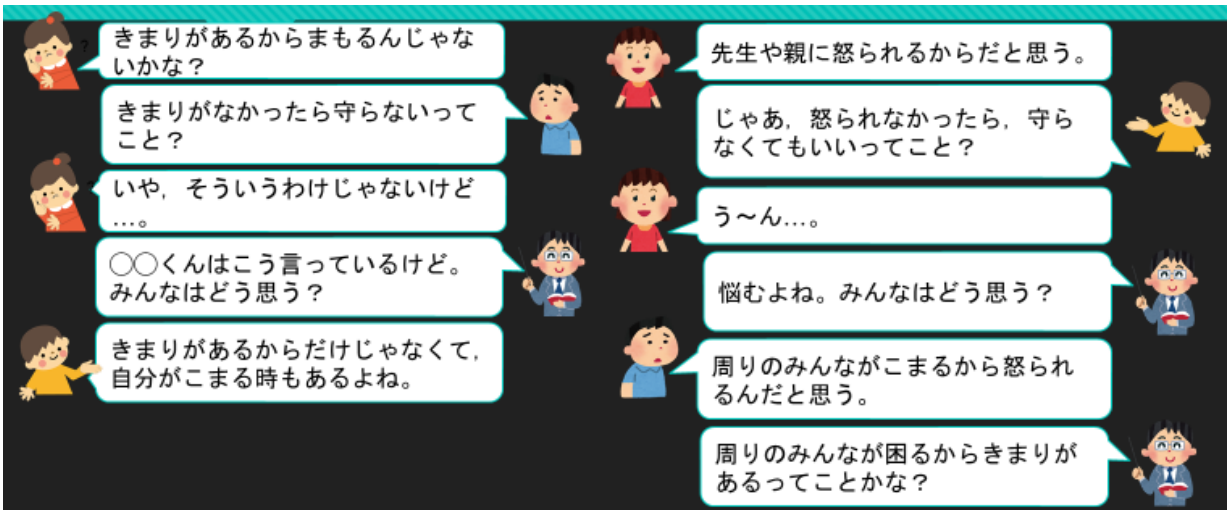
研究大会実践の成果と課題

成果

資料でのできごとを「自分のときは，……。」と経験を語ったり，主発問を投げかけた時は，「自分だったら，……。」「もし，こうだったら……。」と自分の考えとして述べたりと，自分のこととして考えている子供たちが多くいました。これは，子供たちの目指す姿を明確にし，カリキュラムや本時の展開をデザインし，様々な場面で教師が支援をかけ続けた結果だと考えます。

授業の導入では，資料をパワーポイントで作成し，全員が資料をスムーズに把握できるようにＴＶに映して全体に読み聞かせをしました。全体で出てきた場面絵を「ほめられた場面」「しかられた場面」に分け，理由を交流しながら本時の学ぶ道徳的価値や課題を見出していくことができました。

手立て２について，本時の学習では教師が行おうと思っていた「問い返し」が，子供たちの中から出てきました。一人の発言を全体に広げたり，子供たち同士の発言をつなげたりコーディネートしていきました。教師の問い返しを想定していたことで，全体で共有し議論を深めることができました。



手立て３では，実際の校内の写真を提示することで，「こういうきまりあったね。」というきまりを想起できたり，「でも，ついやってしまうんだよな。」「そうそう。」と本音を語り合ったりすることができました，人間としての弱さをみんなで共有することができました。実際に，きまりをしっかり守って生活できている子供たちの様子を紹介すると「いつもまもっているよね。」「たしかにそうだね！」という発言があり，友達に認められたことで，自分の取り組みの良さを実感することができました。どうして守れるのか理由も自信をもって話をしてくれて，周囲の子供たちの「もっときまりを守っていきたい。」という気持ちを高めることができました。

子供たちは，「前の道徳でこんなこと話していたよね。」「生活でこんなことがあったよね。」と様々な学びを自ら関連させて考えたり，道徳の学習自体が「日常の生活で生きる教科」であると捉えたりすることができるようになりました。

課題

手立て１に関わって，「どうしてみんなはきまりを守っているのだろう」という主発問に対して，全体で議論し合った後に，「自分の考えに一番近い考えを選んでネームプレートを貼る」という取り組みを行いました。貼った後に意見を交流し，より道徳性の高いと考えられる選択肢についてよさを認める発言が多かったのですが，ネームプレートを貼りかえる場面では変化が少なく，発言と選んだ選択肢との整合性が合わないように感じました。

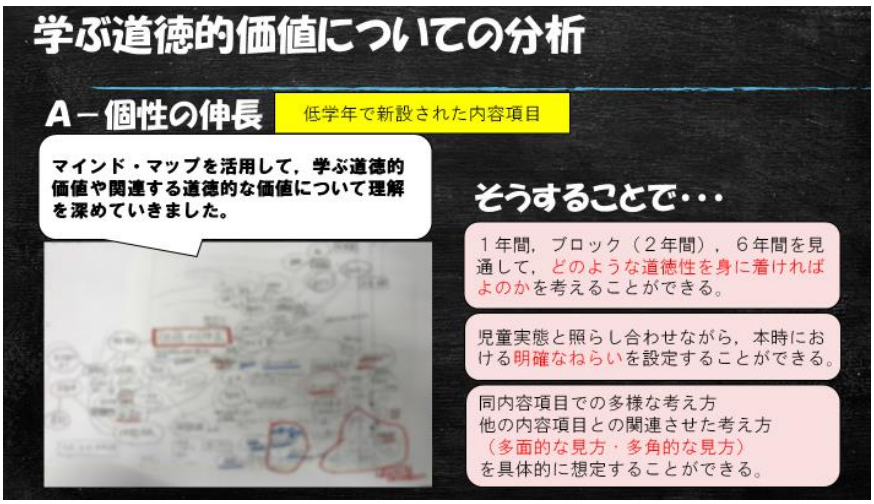
出された意見が同時に複数成り立つものもあるので，掲示方法にもう少し工夫が必要でした。そのために「どれがよりよい意見か」「どうしてきまりがあるのか」という視点を教師から与えてあげると，うまく選ぶことができたのではないかと考えます。

実践においては時間配分がうまくいかなかったことがありました。その解決のために必要なのは，学ぶべき価値（内容項目に関する理解）について，細部まで理解することです。どこまでを道徳科で学び，どこまでをその他の教科や領域で触れたり，学んだりすればいいのか住み分けし，学習内容の精査をもっと行っていく必要性を感じました。また，学ぶ道徳的価値について細部まで理解することで，どんな多面的・多角的な考えが出てくるのかも，しっかりと想定できると考えました。

実践提案「学ぶ道徳的価値の分析を大切にした授業作り」

１年「じぶんのよいところ」（A　個性の伸長）

授業作りを行っていくにあたって，学ぶ道徳的価値について分析を行っていきました。



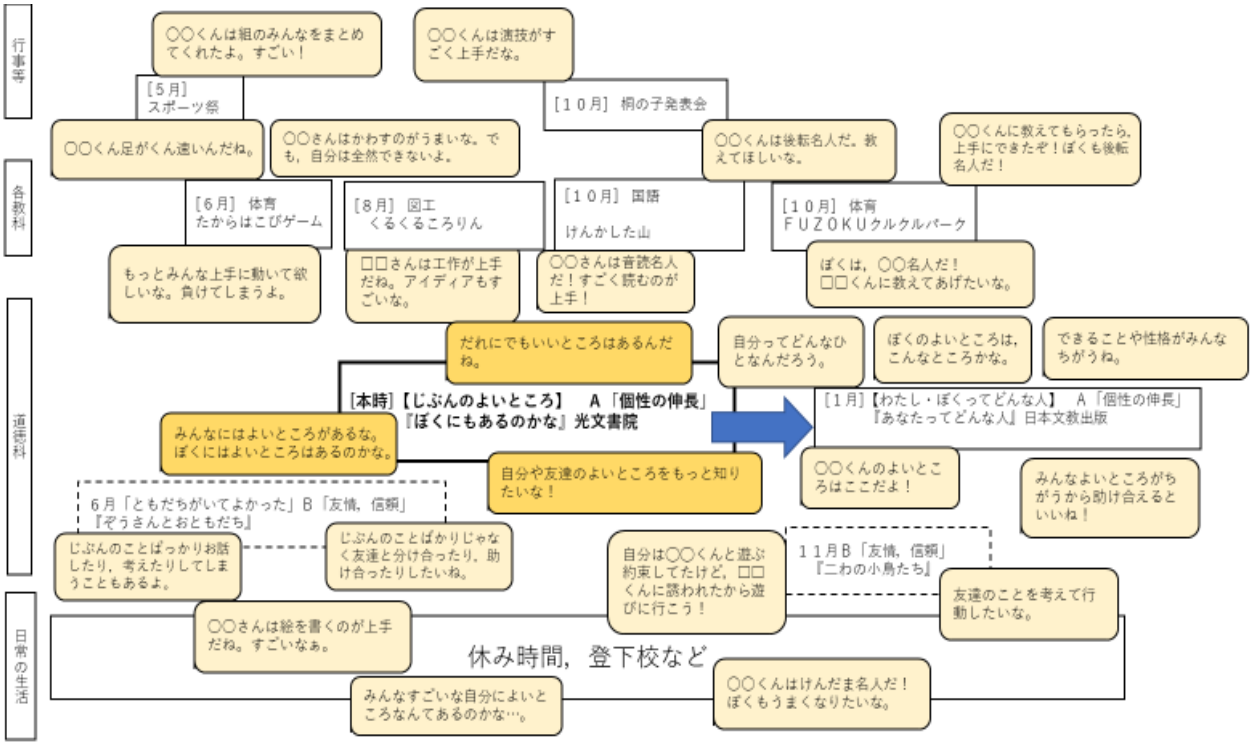
長いスパンでどのような道徳性を身に付けたらよいのかや，子供たちの実態に合わせた本時のねらいの設定，どのような多面的・多角的な考え方ができるのかを想定しやすくなります。その分析を踏まえて，授業作りを行っていきました。

（1）本学習における，資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

道徳教育の全体計画の中の各学年（低学年）で目指す子供の姿に，

目指す子供の姿
他の友達との積極的な関わりを通して，自分や友達のよいところを見つけ，励まし合うことができる子供。

という項目があります。本学習（Ａ－自己の伸長）に強く関連する項目であり，様々な学習や日常生活においての更なる具体的な子供な子供の姿を想定し，各教科の学習や行事などのつながりを強く意識しながら教育活動を行っていきました。



本時のねらいは，

> きまりを守ることのよさやきまりの意義について考えたり，思いを交流したりする活動を通して，身近にあるきまりのよさや意義，きまりを守ることの難しさについて考え，身近なきまりを進んで守ろうとする心情を養う。

とし，ねらいにせまることができるよう本時における学びの文脈を構想しました。

学習活動（○）と子供の姿	教師の支援（☆）と評価（◇）
○　ともだちのよいところについて考える。 ともだちのよいところを教えてください。 ○　自分のよいところについて考える。 自分によいところはあるのかな？ じぶんのよいところはどうやったら，みつけられるのだろう？ ○　挿絵を見ながら，登場人物「ちゅうた」のよいところについて考える。 ちゅうたによいところはあるのかな。 ○　教師が資料「ぼくにもあるかな」を範読するのを聞く。	☆　課題意識をもつことができるよう，自分のよいところにつ ☆　読み間違いがないよう，挿絵を提示したり，必要なワードを黒板に掲示したりしながら範読を行
○　ちゅうたの元気がなくなってしまった理由を考える。 どうしてちゅうたは元気がなくなってしまったのかな？ ○　ちゅうたの元気が出てきた理由を考える。 どうしてちゅうたは元気が出てきたのかな？ ○ちゅうたが自分のよいところに気付くきっかけについて考える。 ちゅうたが自分のよいところに気付くことができたのはどうしてだろう？ まわりの人が自分のよさを見ていてくれるんだね。 ○周囲の人からよいところを見つけてもらった経験を交流する。 よいところを見つけてもらったことはありますか？ うれしかったり，がんばろうって思ったり，自信になったりするんだね。 ○日常生活の「よいところを見つけた場面」の写真を見ながら，わかったことやこれからの生活でがんばっていきたいと思ったことを発表し合う。	提示したり，学習の導入 り取りについて触れたりする。 ◇

開始期

課題意識をもつことができるような発問

・自分のよいところを考える場面を設けることで，「自分のよいところはどこだろう」と考えたり，「うまく見つけられない」と課題意識をもったりする。

展開期

多面的・多角的に考え，議論を促進させる　問い返し

・問い返しの視点や本時で取り上げたい多面的・多角的な考え方の視点を明確にし，必要に応じて問い返しを行う。

多面的な見方・多角的な考え方

・他の人と比べて落ち込んでしまう時の思い。
（人間理解・他者理解）
・よいところを見つけ合えると得られること。
（価値理解）
・他者理解が（相手の）自己理解につながること。
（価値理解）

まとめ期

学びと日常生活がつながる振り返り方法工夫

・本時での学びがこれまでの自分やこれからの自分とつながり，日常生活での取り組みへの意欲を高められるよう，日常生活や学習で相手のよいところを見つけることができた場面の写真を提示

⑵「学びの文脈」を生み，つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み，つなげることができるよう，下記のような３つの手立てを行いました。

手立て①　課題意識をもつことができる発問

本時で学ぶ道徳的な価値について，子供たち自身が自分のこととして考え，課題意識をもつことができるような発問を投げかけました。

子供たちの発達段階を考えると，自分のよさを見つけることは難しいです。しかし，一緒に生活している友達については見つけることが比較的できます。友達のよさと自分のよさについて「見つけやすさ」のギャップを感じることで，自分のよさを見つけることは難しいとより実感できるような発問をしました。

「友達のよいところを教えてください。」という発問をして，友達（他者）のよいところを見つける活動をしてから，「自分のよいところはありますか」という発問で，自分のよいところを探して発表する活動を通して，自分のよいところについては「見つけにくい」「よくわかっていない」ということを実感し，そこから「自分のよいところってどんなところなんだろう？」と課題意識をもって学習に臨むことができました

手立て②　多面的・多角的に考え，議論を促進させる問い返し

子供たちから出された意見を多面的・多角的に考え，議論を促進させることができるよう，必要に応じて問い返しを行いました。その際の問い返しをする視点や本時で取り上げたい多面的・多角的な考え方の視点を明確にしていきました。

【問い返しの視点】

「何が～？」「どこが～？」（確認・焦点化）
「どうして～？」(根拠)
「でも，～？」（批判・反例）
「～の時はどうだった？」（具体）
など

問い返しの視点としては，「何が～？」「どこが～？」と確認・焦点化を図ったり，「どうして～？」と根拠を尋ねたりするなど子供たちの発言に応じて問い返しを行っていきました。

本時で取り上げたい多面的・多角的な考え方の視点としては，「他の人と比べて落ち込んでしまう時の思い。」「よいところを見つけ合えると得られること。」「他者理解が（相手の）自己理解につながること。」について問い返しをすることで多様な考え方を獲得し，他の内容項目とも関連させながら考えられるよう支援をしていきました。

本時で取り上げたい多面的な見方・多角的な考え方の視点

・他の人と比べて落ち込んでしまう時の思い。
（人間理解・他者理解）
・よいところを見つけ合えると得られること。
（価値理解）
・他者理解が（相手の）自己理解につながること。
（価値理解）

手立て③　学びと日常生活がつながる振り返り方法の工夫

本時での学びがこれまでの自分やこれからの自分とつながり，日常生活での取り組みへの意欲を高められるよう，日常生活や学習で相手のよいところを見つけることができた場面の写真を提示しました。よいところを見つけられた時の思いを追体験できたり，よいところを見つけてもらった時の思いを共有したりすることができると考えました。本時で学んだ「自分のよいところはよく見てくれている周りの人が教えてくれること」「よいところを教えてもらえると元気が出てきたり，自信になったりすること」とこれまでの日常生活での経験を結び付け，実感をともなった理解ができるように支援していきました。

今年度の研究を通して

成果

学びの文脈を生み出し，道徳性を育んでいくため，各教科や行事における育てたい子供の姿を明確にし，つながりを意識しながらカリキュラム・デザインを行っていきました。そうすることで，その時間の道徳の役割（補充・深化・統合）や単位時間で目指す子供の姿が明確になりました。カリキュラム・デザインを改善していくためには，学ぶ道徳的価値についての理解を深めていくことも重要と認識することができました。

道徳科の学習では，①道徳的価値の認識，課題意識をもつ（これまでの自分）②対話による道徳的価値の自覚する（様々なものと向き合う自分）③自己の生き方を見つめる（これからの自分）の３つの過程を経て学習を進められるように意識して授業作りを行っていきました。それぞれの学習過程（開始期，展開期，まとめ期）でさまざまな指導方法の工夫が考えられます。その学習過程を幾度となく繰り返していくと，資料を読んでいるとき，登場人物について考えているときなど様々な場面で自分のことや自分の生活でのことについて関連させて考える力が身についていきました。子供たちから「〇〇と道徳の勉強ってつながっているね」「道徳で話してことだ！」という発言が沢山聞かれ，「日常の生活で生きる教科」と捉えているのだと実感しました。

多面的・多角的な考えを引き出すためには，本時の道徳でどんな多面的・多角的な考えができるのか授業者が理解していなければ，引き出しようがありません。授業者がしっかりと理解できていれば，多面的・多角的な考えが出てくるような発問を厳選したり，出てきた子供たちの意見に対して即時的に的確な問い返しをしたりすることができます。今年度の実践では，「どのような多面的・多角的な考え方があるのか」「そのためにはどのような支援方法が可能なのか」を具体的に想定していきました。そうすることで，授業評価を行いやすく，授業改善にも生かすことができました。

課題

１年生という発達段階もあり，子供たちによる書き取りの評価が思うようにできないということがあります。特に１学期は，書くことがままならなかったり，自分の考えをうまく書いてまとめることができなかったりということがあります。発表した意見にネームプレートを張ったり，自分に近い意見にネームプレートを張ったり，発言を（教師が）記録したりと書かなくても評価できる方法をとるようにし，できる限り議論に時間をかけることができるようにする必要があると考えました。しかし，考えを書くことは自分の思考を整理するために有効であるため，国語の「書くこと」の指導で文章を書く力を伸ばし，道徳の学習で書く場面を限定しながら取り組んでいく必要があると考えます。

実践を踏まえての展望

考え，議論する道徳を目指す際に，

- 「考えたい」と思えるようにすること
- 「議論したい」と思えるようにすること

が必要です。

考えたいと思うためには，学習する道徳的価値について「自分にとっての課題でもある」「もっとよくしていきたい」という子供たちの潜在意識に働きかける工夫が必要です。いわゆる「自分ごと」と捉えられるような様々な工夫や教材に出会わせ方を思索していきたいです。内容項目によっても資料の特性があり，その特性に合わせた実践も積み重ねていきたいです。

議論したいと思えるようにするためには，子供たちを共通の土台にあげる必要があります。そのため次の３つ設定が必要だと考えます。

① 資料に書かれてある，登場人物や人間関係，性格などを把握する場の設定
② その時間でめざすものやその話合いで生み出したいものをに共有する場の設定
③ 話し合いの形式（全体なのか，ペアなのか，グループなのか）や話し合い方（立場を選択する，一つのテーマについて話すなど）を設定

土台をしっかりと整えて，決まった何人かが話をして終わりではなく，一人ひとりがしっかり考えて学級全体で作り上げていく議論に高めていけるような実践を積み重ねていきたいと考えます。

次ページからは，提案実践の指導案を記載しています。

１年　特別の教科道徳

「じぶんのよいところ」

授業者　阿保　裕也

1.　特別の教科道徳の目標，道徳科の見方・考え方，育成を目指す資質・能力を踏まえた本学習のねらい

特別の教科道徳の目標	第１章総則の第１の２の(2)に示す道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。
	道徳科の見方・考え方
	様々な事象を、道徳的諸価値の理解をもとに自己との関わりで多面的・多角的に捉え、自己の生き方について考えること。
本時のねらい	
	登場人物の心情や行動について考える学習を通して，周囲の人との関わりが自分のよさに気付くきっかけになっていることに気付き，進んで周囲の人のよさや自分のよさを見つけようとする心情を養う。

2.　本学習について

《主題について》

本学習で取り上げる道徳的価値（内容項目）はＡ「個性の伸長」であり，第１学年及び第２学年では，「自分の特徴に気付くこと。」となっている。各学年段階は以下のようになっている。

各学年段階での指導の観点（Ａ 個性の伸長）

【第１学年及び第２学年】
自分の特徴に気付くこと。

【第３学年及び第４学年】
自分の特徴に気付き，長所を伸ばすこと。

【第５学年及び第６学年】
自分の特徴を知って，短所を改め長所を伸ばすこと。

中学校［向上心，個性の伸長］
自己を見つめ，自己の向上を図るとともに，個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。

個性とは，個人特有の特徴や性格であると言われている。個性の伸長は，自分のよさを生かし更にそれを伸ばし，自分らしさを発揮しながら調和のとれた自己を形成していくことである。児童が自分らしい生活や生き方について考えを深めていく視点からも，将来にわたって自己実現を果たせるようにするためにも重視されなければならない内容である。

特徴は，「他者と比較して特に自分の目立つ点」であり，長所だけではなく短所も含んでいる。自分の特徴を知るということは，その両面を見出すことであり，気付くきっかけは他者から指摘されて気付いたり，実感したりすることが多い。

今回の学習では，「だれにでもよいところがあること」「自分の長所（よさ）は，よく見ている周囲の人が気付いてくれている」ことに気付くことができ，進んで自分の「長所（よさ）」や他者のよいところを見つけようとする心情を育んでいきたい。

《児童の実態について》

子供たちは，自分のよさについて，家族や友達、教師からの評価によりなんとなく意識している。また，自分を他者と比べながら，他者について「〇〇〇くんは△△が得意。」「□□□くんは明るい。」など得意・不得意や性格について捉えられる児童も多くいる。ただ，自分のよさについては，うまく見つけたり，気付いたりすることができない児童も多く，「自分にはよいところがない」「自分はできない」と感じてしまう児童も多くいる。

本時では，なんとなくもっている「周囲の人との関わりが自分たちの長所や短所に気付くきかっけになる」ということを実感し，周囲の人がよさだと認めてくれたことが，自分のよさであると気付くことで，進んで自分のよさや周囲の人のよさを見つけていきたいという心情を育んでいきたい。

《資料について》

本時の学習では，「ぼくにもあるのかな」（光文書院）という資料を使用する。

お話のあらすじ

主人公のちゅうたは，学校の帰り道に友達のよいところを目の当たりにして「自分にはよいところがない」と自信を失い，元気がなくなってしまう。しかし，両親との会話を通して，「みんながよいところをもっていること」「友達のよさがわかるところは自分のよいところであること」に気付き，自信を取り戻していく。このことから，ちゅうた自身ももっと自分や友達のよいところを知りたいとういう思いが高まっていくお話である。

この資料は，ちゅうたが両親との会話を通して，「自分と他者を比較し，悲観してしまうこと」（人間理解）「自分にはよいところがあるのか」というについて考えることができる資料である。

この資料を通して，「自分の特徴（長所・短所）は他者が見てくれるからこそ気付くことができること」「自分にはよいところがあると自信をもって生活を送ることができるようになること」（価値理解）に気付くことができるようにしたい。また，日常場面の写真を提示しながら，その時の思いを交流することで，自分達の日常生活と結びつけられるようにしていきたい。

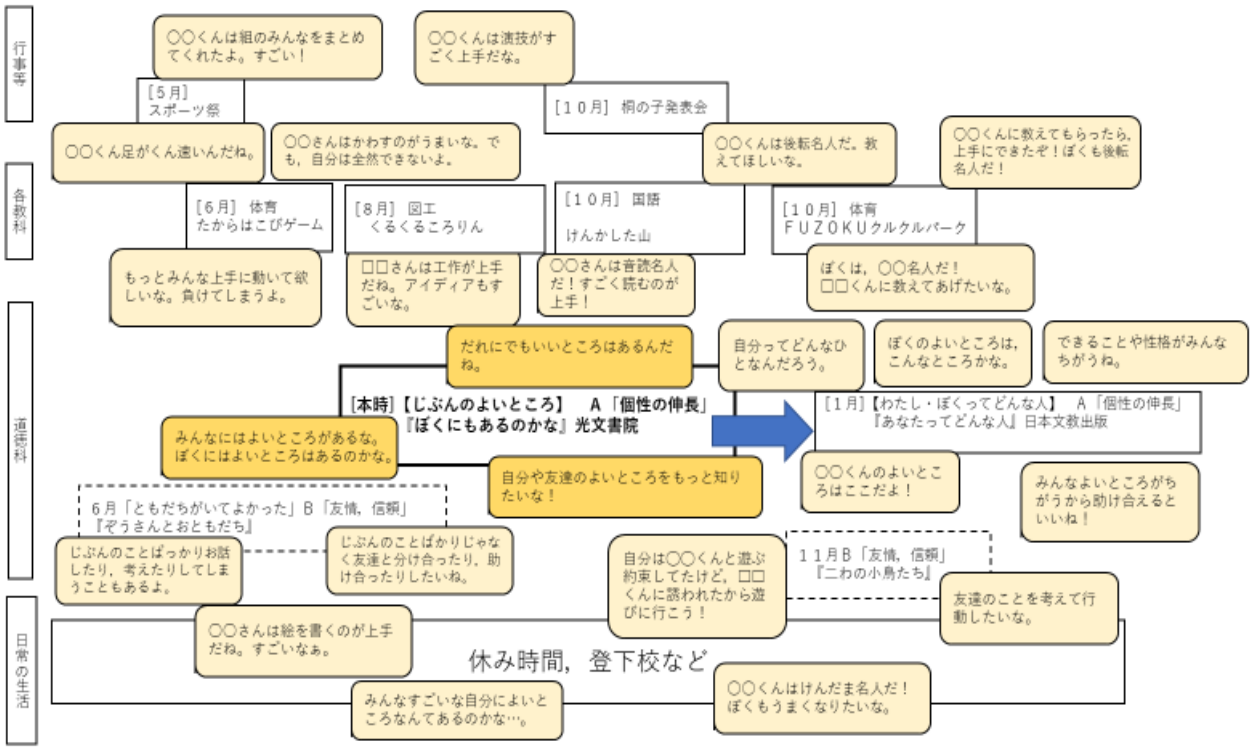
3.　研究との関わり

(1)　本学習における，資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

【道徳教育の文脈】

目指す子供の姿

他の友達との積極的な関わりを通して，自分や友達のよいところを見つけ，励まし合うことができる子供。

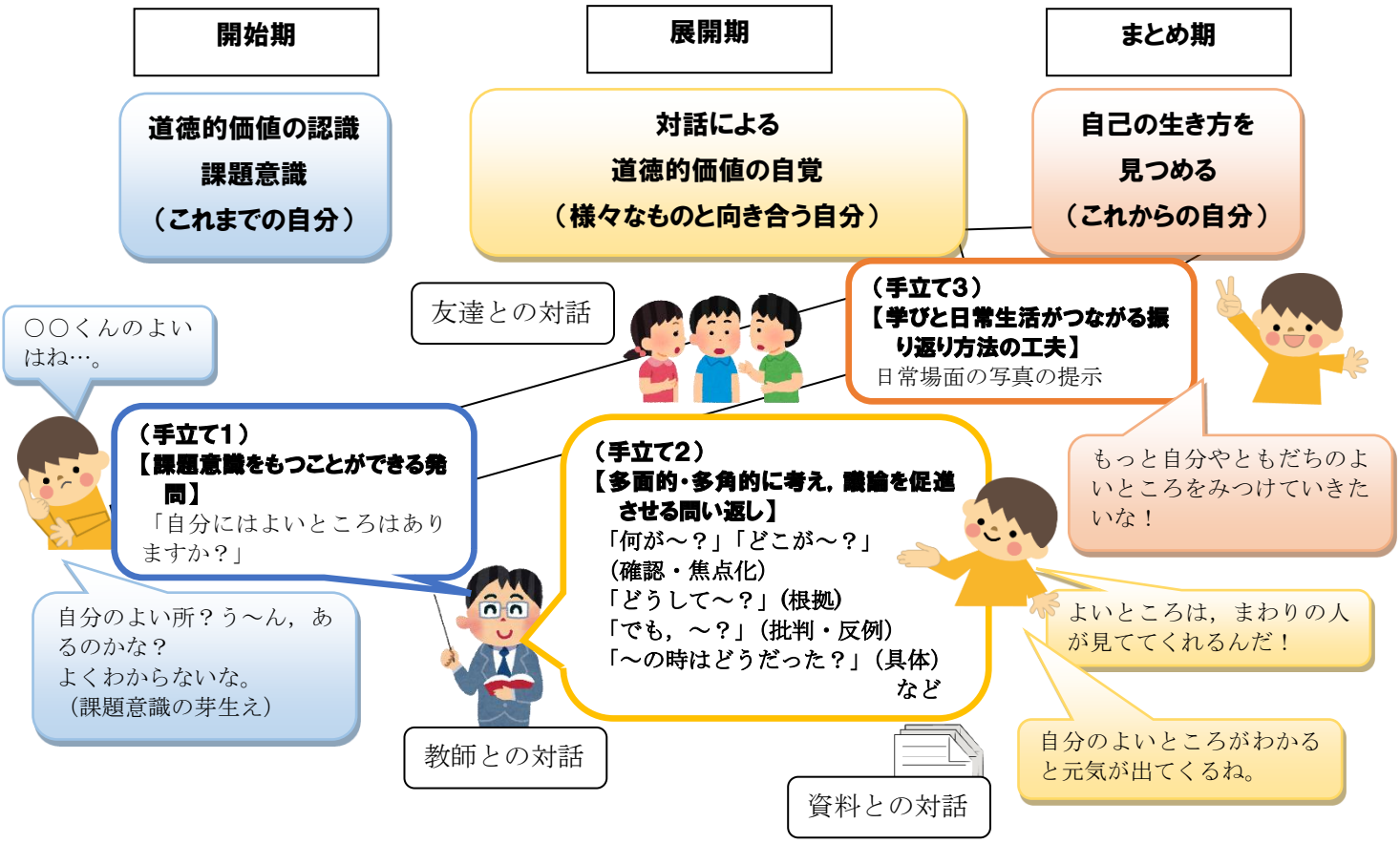


[道徳教育に関わって]

低学年の発達段階では，自分がどのような特徴があるのか自分自身で気付くのは難しい。親や友達，教師からの評価や他の友達と自分を比較しながら，少しずつ特徴を理解していく。様々な場面で，友達のよい面を見出して発言をしている児童がいたら，積極的に取り上げ学級全体で認め合う雰囲気を作っていく。そうすることで，進んでお互いが関わり合い，相互の理解が少しずつ深まり，励まし合える関係を築いていこうとする子供たちの姿が見られるようにしていきたい。

道徳科での学習では，本時の学習で「だれにでもよいところがあること」「周囲の友達との関わりが自分のよさを知るきっかけになること」について触れ，「自分や友達のよいところをもっと見つけていきたい」「よいところを見つけて自信をもって生活を送っていきたい」という思いを高めていく。

【本時の文脈】



(2)　「学びの文脈」を生み，つなげる具体的手立て

手立て①　課題意識をもつことができる発問

本時で学ぶ道徳的な価値について，自分のこととして考え，学習を進めることができるよう課題意識をもつことができる発問を投げかける。自分のよいところを探して発表する活動を通して，自分のよいところについては「見つけにくい」「よくわかっていない」ということを実感できるようにしたい。そこから課題意識をもって学習に臨むことができると考える。

手立て②　多面的・多角的に考え，議論を促進させる問い返し

子供たちから出された意見を多面的・多角的に考え，議論を促進させることができるよう，必要に応じて問い返しを行う。「他の人と比べて落ち込んでしまう時の思い。」「よいところを見つけ合えると得られること。」について問い返しをすることで多面的なものの見方をすることができるようにしたり，「他者理解が（相手の）自己理解につながること。」について問い返しを行ったりすることで，他の内容項目とも関連させながら多角的に考えられるようにしていく。

手立て③　学びと日常生活がつながる振り返り方法の工夫

本時での学びがこれまでの自分やこれからの自分とつながり，日常生活での取り組みへの意欲を高められるよう，日常生活や学習で相手のよいところを見つけることができた場面の写真を提示する。そうすることで，よいところを見つけられた時の思いを追体験できたり，よいところを見つけてもらった時の思いを共有したりすることができると考える。学習で学んだ「自分のよいところはよく見てくれている周りの人が教えてくれること」「よいところを教えてもらえると元気が出てきたり，自信になったりすること」とこれまでの日常生活での経験を結び付け，実感をともなった理解ができるようにしたい。

(3)　本時案

本時のねらい
　登場人物の心情や行動について考える学習を通して，周囲の人との関わりが自分のよさに気付くきっかけになっていることに気付き，周囲の人のよさや自分のよさを見つけようとする心情を養う。

学習活動（○）と子供の姿	教師の支援（☆）と評価（◇）
○　ともだちのよいところについて考える。 ともだちのよいところを教えてください。 ○○くんは足が速いんだよ。 ○○さんは絵がすごく上手！ ○　自分のよいところについて考える。 自分によいところはあるのかな？ けんだまが上手にできるよ。 よいところなんてあるのか あるのかな？ないのかな？よくわからないな･･･。 じぶんのよいところはどうやったら，みつけられるのだろう？	☆　課題意識をもつことができるよう，自分のよいところについて考える発問を行う。【手立て１】
○　挿絵を見ながら，登場人物「ちゅうた」のよいところについて考える。 ちゅうたによいところはあるのかな。 かわいいとおもう。 なにかあるのかな？ ○　教師が資料「ぼくにもあるかな」を範読するのを聞く。	☆　資料を読む必要感を高めることができるよう，自分たちと状況の近い登場人物のよさについて考える活動を行う。 ☆　読み間違いがないよう，挿絵を提示したり，必要なワードを黒板に掲示したりしながら範読を行う。
○　ちゅうたの元気がなくなってしまった理由を考える。 どうしてちゅうたは元気がなくなってしまったのかな？ ほかのひととくらべて落ち込んでいるんだよ。 みんなもそういうことってある？ 自分にはよいところがないと思っているんだと思う。 自分によいところがないって思うと元気がなくなったりするの？ ○　ちゅうたの元気が出てきた理由を考える。 どうしてちゅうたは元気が出てきたのかな？ じぶんにもよいところがあるとわかったからだよ。 よいところがあるとわかると元気が出るの？ 自信が出てきたんだと思うよ。 自信と元気は関係あるの？	☆　多面的･多角的に考えたり，議論が促進されるよう，児童の発言に対して問い返しを行ったりする。【手立て２】 **多面的な見方･多角的な見方** ・他の人と比べて落ち込んでしまう時の思い。 （人間理解・他者理解） ・よいところを見つけ合えると得られること。 （価値理解） ・他者理解が（相手の）自己理解につながること。 （価値理解）

○ちゅうたが自分のよいところに気付くきっかけについて考える。 ちゅうたが自分のよいところに気付くことができたのはどうしてだろう？ お母さんが教えてくれたね。 どうしておかあさんは教えることができたの？ いつも近くにいるからじゃないかな？ 近くにいたらわかるの？それはどうしてかな？ よいところを見つけてあげたいと思ってるんじゃないかな。 じゃ，近くにいるだけでわかるんだ…？ みんなはどう思う？ まわりの人が自分のよさを見ていてくれるんだね。	
○周囲の人からよいところを見つけてもらった経験を交流する。 よいところを見つけてもらったことはありますか？ 音読が上手って言われたことがあるよ。 けんだま名人って言われたことあるよ。 その時どんな気持ちになったの？ すごくうれしかった。 がんばろうって思った。 すごく自信になったよ。 うれしかったり，がんばろうって思ったり，自信になったりするんだね。	☆　これまでの様子が想起できるよう，具体的な場面を提示したり，学習の導入でのやり取りについて触れたりする。
○日常生活の「よいところを見つけた場面」の写真を見ながら，わかったことやこれからの生活でがんばっていきたいと思ったことを発表し合う。 きょうの学習でどんなことがわかったかな。 これからどんなことをがんばっていきたいですか。 もっと他の人のよいところを見つけてあげたい。 自分のよいところも見つけていきたいな。	◇　周囲の人との関わりが自分のよさに気付くきっかけになっていることに気付き，周囲の人のよさや自分のよさを見つけようとしている。【評価】 ☆　本時の学習とこれまでやこれからの生活とのつながりが意識できるよう，日常生活でよい所を見つけることができた場面の写真を提示する。　【手立て３】 ☆　自分の考えを明確にできるよう，黒板に出た意見で自分の考えに近い意見にネームプレートを貼る。